

# 行こうよ！図書館へ



▲図書館HP

## おすすめ本



東京で働いていた32歳の都は、親の看病のために実家に戻り地元のショッピングセンターで働き始めるが…。先の見えない恋愛や家族の世話、仕事のトラブルなど、理想と現実が悩みながら人生の選択をしていく姿が共感を呼んだ作品です。

自転しながら公転する

著/山本文緒

## 利用者おすすめの本



### 農林水産省職員直伝「食材」のトリセツ

協力/農林水産省

野菜や米、花などの農林水産物をもっと知ってもらおうと、ユニークな動画で発信している農林水産省の職員の方々が、各食材についての「おいしい」情報を詰め込んだ取扱説明書(トリセツ)です。この本では、生産地レポート、おすすめ商品やレシピなどが旅行雑誌のような楽しい写真とともに紹介されています。担当者の熱い思いが詰まっていて、夏休みの自由研究にもきっと活躍する本です。



江戸時代に誕生した手ぬぐいは、薄くて丈夫で、吸水性、速乾性もある便利な生活道具です。掃除や炊事、育児や美容の他、インテリアや災害時などでの活用法を紹介します。また、季節や祝い事などのデザインも楽しめる本です。

手ぬぐい使いこなしブック

著/加藤敦子



お寺の掲示板

お寺の掲示板の言葉を通して、もっと仏教に触れてほしいの思いから始まった「輝け！お寺の掲示板大賞」。応募作品はバラエティに富み、深く考えさせられるものから、ユニークなものまでさまざま。きっとお寺巡りをしたくなることでしょう。



ひみつのカレーライス

著/江田智昭

作/井上荒野 絵/田中清代

## 新着本



子どもに迷惑をかけない・かけられない！60代からの介護・お金・暮らし

著/太田差生子



気になる隣のソロキャンプ

発行/東京書店



令和に巡る京都新100寺巡礼

著/秋吉茂



アレにもコレにも！モノのなまえ事典

文/杉村喜光 絵/大崎メグミ



新版 科学者の目

文・絵/かこさとし

## 中央図書館からのお知らせ

### ■郷土文芸誌「文化薩摩川内」第17号作品募集

応募作品/短歌(五首)、俳句(五句)、川柳(五句)、詩(1篇 37行以内)、さつま狂句(五句)、随筆(所定の原稿用紙6枚以内)  
文芸評論・小論・創作・小説(いずれも所定の原稿用紙20枚以内)

応募資格/市内に居住または通勤している方、郷土出身者

応募方法/中央図書館、各分館、地域公民館に備え付けの原稿用紙(23字×20行)の末尾に、住所、氏名、電話番号を明記の上、直接、送付

応募締切/9月30日(木)

販売時期/令和4年3月予定

応募・問合せ/〒895-0076 大小路町14-5 中央図書館



## 問合先

- 中央図書館 ☎0996(22)3542
- 樋脇分館 ☎0996(38)0009
- 入来分館 ☎0996(44)5311
- 東郷分館 ☎0996(42)0053
- 祁答院分館 ☎0996(21)8755
- 里分館 ☎09969(3)2958
- 上甌分館 ☎09969(2)0001
- 下甌分館 ☎09969(7)0311
- 鹿島分館 ☎09969(4)2211



人のとなりに  
永野純一さん(70)

### 川内名物「うまだい」誕生秘話

元々、川内山形屋で金生まんじゅうを作っていた永野さんは、当時流行していた子門正人が歌う「およげ！たいやきくん」にヒントを得て、たい焼きの販売を始める。たい焼きブームの波に乗り、飛ぶように売れたたい焼きでしたが、半年もするとブームは去り、販売も下火に。ある日、たい焼きを買いたい来た中学生の女の子3人、サービスで面白半分で作っていたウインナーとマヨネーズ入りのたい焼きをあげると、それを食べた女の子たちから、「おいしかった。また食べたからどうしても売ってほしい」とせがまれます。その後も、山形屋の従業員さんたちが絶賛する声もあり、ついにウインナーとマヨネーズ入りのたい焼きを商品化。今のように、たい焼きやたい焼きにマヨネーズなどを入れる発想がなかった

当時、物珍しさも手伝って、たちまち大ヒットし、お店には行列ができてしまう。そして、最初は単純に「ウインナー入りたい焼き」の名前で売っていたたい焼きでしたが、大ヒットを受け、ネーミングを見直し、名前で中身も分かるように、「ウインナー」の①、「マヨネーズ」の②、おいしいを意味する「うまい」を掛けて「うまだい」と、さらに「からし」を加えたものを「うまかだい」としました。こうして川内名物「うまかだい」と「うまかだい」は誕生したのです。

「人のとなりに」とは…  
文字通り、その人の隣にいて、思いに寄り添うことや人柄を表す言葉「人となり」をイメージした新コーナーで、人物や活動の紹介だけでなく、その人の思いにスポットを当てることを目的としています。

永野純一さんは、妻の多美子さんと2人で、川内山形屋の1階で、金生まんじゅう店を営んでいます。そして、お店を閉めた後には、時々、その日残ってしまった、たい焼きなどを児童養護施設川内精舎の子どもたちに届けています。今回は、そんな永野さんの行動と想いを追いかけてみました。

川内精舎の開園記念に注文された「うまだい」は、施設からの「5月1日の開園記念日にたい焼きを購入したい」との声掛けで始まり、以降毎年5月1日には、施設からたい焼きの注文が入るようになり、交流が深まっています。そんなある日、永野さんは、大量に売れ残った、たい焼きを前にして、「ふと施設の子どもの顔が頭に浮かびました。そうだ、あの子どもたちは、食べてくれないだろうか」そう考え、早速たい焼きを抱え、足を運ぶと、子どもたちをはじめ施設の方々はとても喜んで、もらってくれました。

不定期ながら施設に足を運び届けるようになりました。近年では、永野さんが訪問すると子どもたちは、「たい焼きのおじちゃん来た」と集まってくる。「ありがたうございます」と深々と頭を下げてくれるそう。その姿を見る度、永野さんは涙が出そうになります。「余った物を届けてるだけなのにあんなにきちんとお礼を言ってくれて。食べてくれるだけでありがたいのに。こっちはありがたいんだよ」

毎年、年末の頃になると施設の子どもたちからメッセージが届きます。それは、たい焼きの形をしたメッセージカードだったり、年賀状を模した巨大なお手紙だったり。永野さんは、一番新しい物だけをお店のいつでも見えるところに置き、それ以外は、大事に保管しています。

「昔は、忙し過ぎて1年間で、休みが1日しかなかったこともあった。辞めたいと思ったこともあったけれど、お世話になってい



取材を終えて  
月曜日と火曜日をお休みとした永野さんは、「余った物を届けてもらえるだけで、広報紙に載せてもらうような立派なことは何もない」そう苦笑いしながら、今日も川内山形屋の1階であるこやウインナーと一緒に真心を包んでいます。

山形屋さんや川内精舎の子どもの声でここまでやってこれた。これからは、無理のない範囲でやれるところまで続けたい」